『大キライで大スキな人』

貴志川中学校　２年　丸木　陽菜

皆さんには、兄弟がいますか。私には、２つ下の弟がいます。私が１歳２か月のときに母のおなかから産まれてきました。体重はまさかの父が産まれたときと、まったく同じ体重の３２７８グラムでした。

弟は産まれて、２日後にきゅうきょＮＩＣＵへ、入院することになりました。入院した理由は、Ｂ群溶血性連鎖球菌「ＧＢＳ」に感染していることが判明したからです。赤ちゃんが、ＧＢＳ感染症を発症するのは、１パーセント前後であり、発症率は、低いのですがひとたび発症すれば、急速に重とく化し、死亡したり後遺症が残ってしまうことも少なくないといわれている注意が必要な感染症なのです。

私の弟は、発見が早かったため、大事には至ることなく、無事に退院することができました。

そこから大キライな弟との戦いが始まりました。弟が退院してきてからは、母の母乳をたくさん飲んですくすくと大きく育っていきました。

はじめの戦いは、大きい泣き声との戦いでした。弟は、夜中家族皆が寝ているときも、構わず大音量で泣きわめき母乳をほしがり、皆を起こすのでした。私はその頃のことをよく覚えています。

その次の戦いは、弟の行動範囲が広がったときでした。私が食べている物は全てほしがり、私が遊んでいるおもちゃは全て取りにくるようになり、そのたびけんかするようになったのです。この戦いは、年齢にかかわらず、今でも続いている戦いです。

しかし弟との本当の戦いは、晩ごはんのときです。いざ食卓におかずが並べば、戦争開始の合図です。私は、普段野菜から食べ始めるのですが、弟は、全くの真逆で、メインのおかずからどんどんと攻めていくのです。私がメインのおかずを食べようとするころには、大キライな弟は、自分の分をすでに食べ終え私のおかずを狙ってくるのです。そこできょうだいげんかが勃発し、そのたびに母から雷が落ちるのでした。

でも、そんな大キライな弟でも、いいところもあるのです。それは、私より力があるところです。私は、握力が弱いため、ペットボトルのキャップが開けられないのですが、そんなときは、大キライな弟がしれっと開けてくれます。そのときは、心の中で「うわぁ、めっちゃやさしいやん」と一瞬思うのですが、ふと弟の顔を見ると、「ドヤッ」という顔をしていて、「やっぱり大キライ」という残念

な気持ちになってしまうということが度々あります。
　そんな私の弟ですが、尊敬することがあります。私の弟は、小学校３年生のころから、相撲を習っていて、２０２４年に和歌山県で開催された相撲巡業に招待してもらい、有名な力士の人に稽古をしてもらえることになったときのことです。私の弟は、現在も幕内力士として活躍している宇良関に胸を貸してもらえることになり、約３６００人の観客の前で、物おじせずおもいっきりぶつかっていた姿を見て、初めて弟がすごいなと感心しました。
　弟は、中学校になっても相撲を続けていきたいと言っており、皆とちがう道へ進もうとしているみたいです。
　普段は、ごはんを取りあう大キライな弟ですが、和歌山県で１位になりたいという自分の夢に向かって、頑張っている姿を見ているときだけは、自慢の大スキな弟です。
　これからも大キライで大スキな弟を応援していきたいと思います。「これからも頑張れ、大スキで大キライな人」